（1） 第36號 芦 高 新 聞 昭和26年10月10日 （水）

芦高新聞

発行所
芦屋市宮川町
兵庫縣立
芦屋高等学校出版部

技術を第一とする
芦屋寫眞室

# 文化の秋

## 第3回
# 記念祭の幕開く

祭典は遂に幕開いた。

十月六日の前夜祭から翌日の体育祭にと僕達は澄みきる秋の空の下に湧き上る力を發散した。

学校が一つの流れに沿つて今、素晴らしく早く動いている。一年間の結實へのプロセスの中にあつて「何が一番大切なのか」僕達は改めて考えねばならない。

## 第三回記念會日程

十月六日（土） 前夜祭（フォーク・ダンス）
十月七日（日） 第六回体育祭
十月九日（火） 第三回音樂會
　　　　　　　遠藤磨里孃招待演奏會
十月十日（水） 全關西辯論大會
　　　　　　　阪大教授 森昭氏講演會
十月十二日（金） 第五回・文化祭・展覧會・バザー
十月十三日（土） 〃
十月十四日（日） 〃 （一般公開）
　　　　　　　終幕祭（ファイアー・ストーム）

## 論說
# 文化祭に寄す

まだ文化祭を前にしていた頃学校はその態勢を整えるのに忙殺されていた。先生方と執行部を中心とした自治会の役員は大童の活動であつた。しかし学校の何処かに空虚な感覚が流れていた。例えば授業の際の一種言いようのないざわめき、このざわめきが曲物である。祭と言う言葉にまどわされ浮いているのか下級生になる程来るべき文化祭の真意義に就いて自覚を持つているものが少いようであつた。とすれば、これは啓蒙活動の宣伝として自治会役員の責任と言うことになる。誰も彼もが忙しいと言う。しかし乃れの忙しさの本質を凝視めている者は、意外に少いのである。

例えば我国が戦争に突入する時、誰も彼もが狂奔していた。乃れの利益を計算しながら政府の嘘寒い口車に乗つていた。蓋を開ければあの結果であつた。泥縄式と言う一面から見れば一つの悲喜劇であつた。

この七日間の行事は吾々芦高のあらゆる弱点、あらゆる利点が美麗にスポツトされる事が必定だ。スポーツ、演劇、音楽などの演技面から事務の運び、起居振舞迄所謂吾々の実力が如実に示されている。吾々の日常のあらゆる活動修練が一個の頂点として表われるのであつて、何れ終了後には全校的な反省が為されるであろうが、其時こそは月並な反省ではなくて、根本的な反省が望ましいと思う。思うに吾々青年は馬の耳にたかる蝿のような批評家や、ひからびた点取り虫になりたくない。

あらゆる他人の誠意ある行動にツバを吐きかけ、自身は何物をも創ろうと努めぬ青白い人達や、学校入試を中心として白紙の上に文字を書き込み、只点数獲得のためにのみ自身の日常を賭けようとする人達は真に笑うべきだ。

吾々は乃の時間、乃の努力を生命の成長に賭すべきだ。文化とは兎に角一個の確実な家が建つことだ、お祭騒ぎで家が建つことはない。長い孤独の時間をどのように賭けるか如何に乃れと闘うか、此処にあらゆる表現の価値決定の基準がある。

「平和時は恐しい。一人で乃と闘わねばならぬ」とヴアレリイは語つた。

講和会議後の日本は嫌でも一人立ちしなければならぬ。甘えることは許されぬ。私は真の文化に関わる二つの典型を示したい。ともすれば他人との協力を欠こうとする傾向には、自分の危険、自分の時間的ロスには一切かまわず戦場の最前線迄ヴアイオリンを抱えて行き兵隊達の魂をうるほしながら「音楽とは最もヒユーマンなものだ」と語つたメニユーヒンを、又泥縄式の傾向にはドストエフスキイを語ろうとして、彼のあらゆる小説を熟読し、手に入る限りの伝記を読み、ロシヤ語迄も噛りなぞし乍ら、やがて乃れがドストエフスキイに出会う最後の時間をひたすら待ち続けた、批評家小林秀雄の努力とを。

◇ ◇

## ＝姫路西高校文化祭を訪ねて＝
# 粋を集めた壓巻〃シラノ〃

校長先生直筆の紹介状を片手に自治会代表といういかめしい役割を帯びて姫路に着いたのはまだ正午には餘りある十一時過ぎであつた。何分未知の処とて校長先生の略図を唯一の案内者として先ず駅前通りの繁華街へ出た。酒井氏十五万石の城下町として栄えたという昔の面影を引きつぐ如く規模は小さいが所狭しと顔を並べている店舗はそれぞれ各種各様に趣向をこらし大都市のそれに勝るとも劣らぬあたりモダンを追う日本人の感受性の強い一面かとも思つているうちに十字路に出た。しかし私はそこでしばし足を留めざるを得なかつた、というのはその通りの行き詰く処に美妙且雄大な姫路城がそびえていたからだ。白鷺の異名で名高いこの城が今までの商店街になおふさわしいのはやはり姫路が姫路たる所以だろうと感じ入つた。が姫路へ城見物に来たのではない私はその十字路を右へ曲つた。やがて目的の姫路西高校文化祭会場たる市公会堂を目にしたのは下車してから十分程経つた時であつたろうか。

来場者を招くが如く風にかすかに動く〃祝姫路西高記念祭〃と朱書きしたアーチをくぐつた私は受付の女生徒に来意を告げると直ぐ〃御招待〃と印された記念祭プログラムと共に招待者の意味か白色の布テープの色章をくれ「二階へどうぞ」とのことで階段を上つた。二階の座席は招待席と銘うつてある関係上生徒は役員以外はオフ・リミツトらしいがその半分以上が詰襟とセーラーで埋つていた。あちこち警察予備隊の人達の顔を見受けたのは元第十師団司令部の所在所として有名だつた土地柄だけある。ではここでこの文化祭の番組を紹介してみよう

【午前之部】
1 器楽合奏「ドナウ河の漣」ほか 器楽部
2 挨拶 学校長、生徒会長
3 劇「なだれ」 演劇部
4 コーラス「アヴエマリヤ」ほか 音楽部
5 謡曲仕舞「小督」（駒の段） 能楽部
6 コーラス「天地創造」ほか 音楽部
7 劇「シラノ・ド・ベルジユラツク」 演劇部

【午後之部】
1 ギター・マンドリン合奏「ジプシーキャンプ」「フオスター集」ほか 三年有志
2 コーラス「波のすさび」ほか 音楽部
3 挨拶 学校長・生徒会長
4 謡曲仕舞「草子洗小町」 能楽部
5 西洋舞踊「乙女の祈り」「セレナーデ」 二年有志
6 コーラス「僧院の庭」ほか 音楽部
7 ギター独奏「ロマンス」ほか 器楽部
8 舞踊「松の緑」「かぐら面」 一年有志
9 劇「シラク・ド・ベルジユラツク」 演劇部

で八時開幕で五時閉幕の予定とある。居に落ち着き舞台へ目をおろすと「シラノ・ド・ベルジユラツク」の始まつた処であつた。諸君は〃シラノ〃と云えばすぐ映画のそれを思いつかれるだろうが先日文学座がやつていた（もつとも私も写真で知つたのだが）のとそつくりの舞台装置であつた。ルイ十三世治下のフランスの剣豪でかつまた詩人・理学者・哲学者・音楽家等打ては響く毒舌の名人加えて当代随一の巨大にして雄壮な鼻の持ち主シラノを演ずる藤岡君は次のように言つている。「とにかく美しくやさしいシラノの魂、クラシックの中に近代的なセンスを持つシラノの人間を中心に新しいロマンチックな精神を咲かせたく思いますが何分にも八面六臂の偉大なる人物を描き出すことは凡庸の身の幾ら背のびしても遠く及ばず巨象の一斑を示すに過ぎない結果になるでしようが、学生時代最後の思い出として力一杯演ずるのみです」

エドモン・ロスタンの妙味ある奸智・洒落に富んだ文体をその舞台で演ずるの難かしさを告白した彼ではあるが若さと熱でやつてのけるあたり仲々の熱演でロクサーヌをやつた山本さんと共に一段と光つていた。勿論この二人の異彩を放つた原因は他にもあるが経験の浅い私の口から単なる批判者の批判に落ち込まぬ先に留めておく。愈クライマツクスやや長すぎる嫌いもあるがシラノの独白の場に入る、即ちクリスチャンの最後の手紙を胸に修道院へ入つた、ロクサーヌが自分を真に恋しているのはシラノ彼自身であることを初めて知つた時シラノは世の中の虚偽と不正と妥協と卑怯をののしりながら自由の名をたたえつつ短かくも華々しい一生をとじる処で幕となる。割れんばかりの拍手に合せて二階の各所から白黄赤青黒の五色のテープがその劇を祝する如く舞台に幾十となく投げ込まれる。芦高ではちよつと見られぬ風景だがやや興奮した雰囲気を一層高調させるのに効果的だ。この「シラノ・ド・ベルジユラツク」が演劇部十九名を中心に照明は美術部が受持つていたが文化部の粋を集めたこの文化祭の圧巻にふさわしいようだ。

やがてライトがともされ会場がはつきりと浮き出された。場所が比でなくステージの整然さといい豪華な幕といい座席設備の良さといい都市一流の映画館等にも決して劣らない。

マイクから私の呼び出しがあり受付へもどると生徒会長（生徒会とは芦高の自治会にあたるもの）木村君と話を交わす機会を得た。芦高と同様企画の殆どは生徒自身が行うそうでその日程をお聞きすると

文化展 九月廿七・廿八日 於 西 校
文化祭 九月廿九日 於 公会堂
体育祭 バザー 九月卅日 於 西 校

文化展は講堂で工芸部・美術部・書道部・写真部・時事研究部・体育館では生物部・化学部・物理部・郷土部・中学招待作品・割烹室で食物展・映写室でH・Y映写・生物スライドその他被服展・茶道展・華道展といつたものが展覧されたそうである。

さて私の訪ねたこの文化祭は学校からやや離れた公会堂で催された関係上用具をトラックで運ぶ等その苦労も一通りではなかつたようだ。会長の話によると昼からは生徒は明日の体育祭・バザーの用意の為学校へ帰りそれぞれの仕事に忙殺されるらしい。午前の部、午後の部のプログラムに重複が多い等色々思案を催す点も多々あつたが、「何分四日でやろうと思いますと」と言う会長の微かなほゝえみの中にはつきりと自信のほどがうかがえた。会長の案内で再び二階招待席へ座したが、会長ともどれば何処も忙しい身分らしく「いうぞごゆつくり御覧下さい」となつて楽屋裏の方へ姿を消した。

その時舞台では二つのスポツトライトを一つにあびて純白の衣をまとつた女生徒が舞台いつぱいに乱ねまわる。午後の部五番目の西洋舞踊が都合により都合のよい処へ繰り上つた様である。はち切れるような若さにみなぎる動的美と音楽の交錯が観客席の眼―眼―眼を幻惑させる。

次が僅か三人編成のギター・マンドリン合奏、マンドリンは印象的だつた。

次はコーラスである。約七八十人から成るものだが男子はその三分の一にも充たない。残念ながら私はこの合唱の途中でどれ以上ゆつくりする時間的餘裕を持つていなかつた。宿舎も食堂もあることだし是非一泊して明日の体育祭もと会長に進められたのだが。

私がこの文化祭を訪ずれて全体として受けた感じはこの会場に来るまでに受けた印象と全く同じだつた。そのことは単なる偶然の一致と片ずけたくない。

〃古きゆかりの数多き此処播磨野に新たなる世代の先がけて理想の双葉育てん〃意欲に燃える姫路西高校に

〃朝な夕なに白鷺の
秀いでし姿仰ぎつつ
混濁の世に一すじの
道を求めてまことなる
学びの奥をきわめんと
集いし千餘の若人よ
とわに幸あれ我母校〃

と学生歌を口ずさむ姫路西高校生に祝福あれと祈りつつ文化祭会場を辞した。

汽車の窓から姫路城の天主閣を見た時私の時計は三時に近かつた。（九・廿九・三B 山下）

# 学園寸描

三峯

◇硬球は秋空にして高くみえスマツシングは今やきまりぬ

◇すこやかに伸びのよろしくやゝ黒き乙女コートに躍る午後なり

◇蹴球は中空にとびナイン等が男の子命をかけて走るも

◇ピンポンの球よくはずむ昼下り窓陽あかるく乙女等笑ふ

◇藤棚の樹蔭に両人寄り添ひて文読む乙女ひそと音せず

◇工匠らが寄りて建てゆく図書館の白くしよう洒にデビユーするとき

（以下二首、わが家舞子浜に遠からず）

◇舞子浜わが踏む砂に足跡の幾つか見えて人はあらなく

◇磯浪の寄するともなき静けさに吾れを憶きつつ思うは何ぞ

（筆者は本校々長）

# 裏表獨語

▼講和会議講和会議―我等が講和会議、日の丸だ、国歌だ、インターナショナルだ▼そして遂に講和は成つた。しかし窓をあけて見ればああ、何と云うおだやかさ▼講和には二種類あり、単独講和に全面講和と並べてみせて言い合つたのが目に浮ぶ、お汁粉に二種類或いは三種類あり、他の店のお汁粉はみな偽物で元祖の本物の本物は当店だけでございとやる手口だつたか▼しかし何はともあれ夢を持つことはいいですね、終戦で破れたつてかまわない兎に角それに向かつて近ずいて行くところが▼こう云つた人が本校にいるトルストイは「幼年時代」と云う小説を書いた、だが僕の幼年時代にはトルストイの様な素晴らしい思い出の記憶はない、少年時代にも彼の様な色彩ある生活は思い出せない、だから僕は確実にトルストイ程の文豪にはなれないのだと▼まあ、秋なんだ。空は見事に青いのだ。少し位は大げさな夢を持ちたまえ（I）

# 鐵路のアンナ

## ―デュヴィヴィエの技術について―

杢谷舜造

カメラの眼は非情である。そこには肉眼がしばしば犯す主観のあやまちがない。視野に入つたもののすべてを冷酷貪欲にレンズに収めとらねばやまない。しかしカメラがその対象把握の能力においていかに機械的に万能であつても、それが直ちにすぐれた芸術的表現力とは云い得ないのであつて、カメラを駆使して人生に迫ろうとする芸術の使徒は、むしろこの光学機械のもつ正確無比の機能を恐れなければならない。そのリアルな描写力はまことに現世紀の驚異であるが、利器は濫用されればかえつて利器そのものの効力は減殺されるであろう。

映画アンナ・カレーニナの魅力は死を前にしてさまようアンナの描写にある。十五巻の長尺にわたつて室内場面の多いこの作の中で、大詰の雨の夜の小駅のシーンはアンリ・アルカンの柔軟な画調と相まつて全巻随一のフオトジエニックな情趣を醸し出している。停車している機関車を正面からアツプで捉えて、横なぐりに吹きつける暗い雨が一瞬忘れ得ぬ夜の吹雪となつて舞う―かと見るとまた現実の雨にもどるアンナの回想の一カットなど云いようもなく美しい。全体この映画は鉄路を構成のモティーフとしている。アンナとウロンスキーの恋の発端と進行そしてその終末がすべて鉄路に関連している。しかも二人の最初の出会いの直後の椿事（駅夫の轢死）が早くも結末の悲劇を暗示する。アンナの後を追つたウロンスキーがはじめて愛を告白する吹雪の夜の小駅、給水のため停車する列車を点検して廻る駅夫の重苦しいハンマーの音が不吉な運命の伏線としてその後もしばしば使われ、カタストロフにおいてもその同じ音がアンナを死に追いやる。こうしたモティーフによる一篇の構成はおよそ映画構成の定石通りをいつているので、実際の用い方の技術に難点はあつても大きな誤算はやつていない。むしろ吹雪の夜と雨の夜との同一の場面設定は、その間に流れる「時」の皮肉を感ぜしめて悲劇的効果をある程度高揚せしめている。しかし問題はその後にある、カメラは最後に冷い屍となつて鉄路に横たわるアンナまでも捉えねばならなかつたかどうか。人はこれをしも冷厳な現実から眼をそらさないすぐれたリアリズムとしてほめたたえるかどうか。もともとこの物語そのものが決して生々しい今日的な題材を扱つたわけでなく、冒頭と末尾とを小説アンナ・カレーニナの頁をもつて開き且つ閉じたようにやはり古典的ロマンとしての構想に立つていた以上、アンナの死も何らか象徴的な手法によつて処理されねばならなかつた。モティーフの鉄路が単に鉄路ではなくて、人生の宿命の旅路とでもいうべき一種の象徴性を帯びて感ぜられるが故に、なおさらこの手法上のミステイクが惜しまれる。

この破綻は、カメラのあくまで現実追求的な性格に押し流されて、その描写力を制御し得なかつたところのカメラへの過信から生じたものと解釈される。つまり「写し過ぎた」のである。デュヴィヴィエの作品にはこうした錯誤がかなり多い。私は彼の作品についもカメラの饒舌を感じている。映画は単に静止したタブローの連続ではない。カメラは対象の動きを巨細に写しとるとともに、また自らの動きをもつて対象を追う。つねに前進し、後退し、フオロウし、パンする。そしてカメラ自体の運動と被写体の運動とが交流してさまざまなリズムとテンポを織りなしながらいわゆる四次元の世界を切りひらく。映画の格調を決定するものが編集技術（モンタージュ）にあることはいうまでもないが、それ以前にこのカメラ操作の技術が大きな役割をしていることも忘れてはなるまい。非情のカメラはその「心」を持たねばならぬ。精鋭な機械力が放恣に流れるのを押えるところに演出家の苦心があるべきであろう。モンタージュの要諦は結局「省略」に帰するのではあるまいか、デュヴィヴィエの作品はあまりにも省略の美に乏しい。何もかも語りつくそうとしてのカメラを振り廻しすぎるのである。

病床のアンナが夢魔にうなされる場面にしても、二重写しになつた無気味な老駅夫の幻覚は、彼女が憎み恐れている夫カレーニンの出現がそれに続くことによつて現実的な裏打ちをする苦心が払わており、さほど荒唐ではないのであるが、作者得意のこういう技巧が実は鼻に付くいやみに感ぜられてならない。あまりに容易に技術によりかかつているところが見えすくのである。ウロンスキーが自殺を試みる場面から猟銃の発射音を収穫の大鎌の音にかぶせて鋭く局面を一転した技巧は、人の意表に出た新鮮さがあつたが、田園でのレーヴィンの結婚式とアンナの堕落とを馬鹿ていねいにカットバックに仕上げたのなどは、あまた例の手かとうんざりさせられる。かつて「商船テナシティ」のラストで出港するテナシティ号の舳と鉄道の光る軌条とのカットバックで、セガールとバスチヤンの運命の岐路を表現しようとしたのも生硬なものであつたが、今度の場合も技巧が技巧として浮き上つてしまつて、作者の意図した切迫感はそれほどでもなく、むしろ説明的な描写になつてしまつた。都会での産業的な生活を清算して田園に帰農したレーヴィンの健康で建設的な生活と次第に恋の深みにはまりこんでゆくアンナの倫落の姿とは、原作でも意識的に対照されているが、それは原作の大きな構想の中でのことで、こんな局部的末梢的な対比ではない。一つにはアンナの病床での告白によつてカレーニン夫妻が一応和解した後だけに、アンナがそうした重大決意をするに至る心理的過程が十分に描かれていないうらみがあり、この点はこの映画の脚色上の大きな欠点であろう。

アンナ・カレーニナを観た前夜、朝日会館でメニューインを聴いた。割れるような拍手を浴びて楽屋へ引上げる彼は左手に愛用のストラディバリの首を握り、右手の弓を前後に大きく振りながら、かなり大股でやや前屈みに調子をとつて歩く。一歩々々うなずくような会釈するような歩きぶりである。その無造作でしかも誠実味の溢れた態度は、そのまま彼の演奏の持味でもあつた。アンコールに応えて再び登場した彼は、私たちの耳に親しいドヴオルザークの新世界の第二楽章ラールゴを弾いた。それはレコードで聴き馴れたストコフスキーの指揮する交響楽の中のホルンの独奏の旋律にくらべて、ぶつきらぼうなほど卒直な弾き方だつた。もともと甘美で哀切を極めた曲がストコフスキーでは十分思い入れたつぷりにセンチメンタルに仕上げられている。それにはそれとしての良さがあるが、メニューインの同じ曲を聴いて何か物の焦点が合つたようなすがすがしさを感じた。そしてこの誠実卒直さが、その夜の番組の白眉であつたスペイン交響曲（ラロ）の奔放さや無伴奏パルティータ（バッハ）の端厳な美しさにつながつていることを知つた。細かい提琴の技巧は素人目に分るはずもないが、とにかくメニューインの場合は、技術が人格であつた。そしてそれでこそその技術は一つのすぐれた芸術的個性を形成していた。メニューインは期待以上でも以下でもなかつた。過不足なく私たちをたんのうさせた。

ジュリアン・デュヴィヴィエは非常な自信家だ。彼は自己の技術をあまりに過大評価している。彼はやたらにカメラを動かす、技巧の大見得を切る。そうした映画への過信がしばしば技巧過多となつて逆に芸術の貧困を暴露する。この自信家はまた当然大の野心家だ。いままでルナールの「にんじん」にしろヴィルドラックの「商船テナシティ」にしろ小粒ながらそれぞれ問題的な文芸作品を映画化して世評を呼んだのも、映画技術をもつて文芸を征服しようとの野心と、それについてはまた少なからず自己の才をたのむところがあつたのではあるまいか。それともまたこれだけの自信家にして、案外後進芸術である映画にたずさわる劣等感から由緒正しい既成芸術の殿堂にあこがれたのだとの皮肉な観方も出来ないではない。一応いろいろな題材をこなしてみせるところは彼の技術の強みであり、映画ジャーナリズムから常に巨匠をもつて遇せられるのであるが、時に具眼の士によつて「職人」の名で蔑視せられ、そのオリジナリティの欠如を突かれるのも、彼の華々しいカメラ操作や多辯すぎる技術が今一歩「個性」のきびしさを感ぜしめないというところに理由があるのだと思う。

彼の騒々しいカメラ操作をおよそ対照的なのは小津安二郎のスタイルである。カメラの動きをつとめて抑制した静的なカットを一つ一つ丹念に積み上げてゆくその手法は、文学における志賀直哉の簡潔端正な風格に相通うものがある。しかも次第に主題の積極性を失つて自己の小天地をかたくなにまもつてゆこうとする潔癖さまで両者に共通するものがあつて、日本の芸術家の風土的な特質をそこに見得るようにも思う。しかし小津のあくまでストイックな様式はさまざまな技術を濾過して深められてきた結果であつて、小道具の一カットさえもゆるがせにしない、その凝り性とともに、ある徹底したきびしさをそなえている点、彼の描く世界が次第に狭い袋小路に入つていることには不満ながら、やはり高く評価したい。

デュヴィヴィエと小津、技術の氾濫とその抑制と、いずれが真の技術なりやということは、単に技術だけを抽象して論ずることはその当を得ないのであつて、さればこそ簡単ながら前者の旺盛な野心と後者の自慰的な消極性に触れておいたのではあるが、器量の大小をしばらくおいてその洗練性においてみるならば、デュヴィヴィエは小津に到底及ばないのであつて、まだまだ野暮くさい。

しかしながら小津の小さな日本的彫琢の様式美をもつていまや世界芸術の王座にある映画を律することは、もちろん当を得ない。デュヴィヴィエの自信と野心、それはわき目もふらず映画技術に打込んでいる一個の楽天家の姿であつて、その良さも悪さもいまだ半世紀の歴史しかもたぬ映画の芸術としての若さのあらわれではあるまいか。彼に先行する故ジャック・フエーデやルネ・クレールの示した業績は彼以上であつても、決して彼以下ではない。たとえそうした一、二のピークを数え得たにしろ、映画芸術全体の現段階がデュヴィヴィエのもつ若さと未熟に象徴的にあらわれているとすれば、彼を推して現代一流の映画人とすることに異議はない

「若さ」――それは過剰である。鉄路に横たわるアンナの屍はこれからもしばしばくりかえされるだろう。（一九五一・九・二九）

---

# 一青年の聲

小松八郎

歴史と人間の分裂と不均衡という恐るべき現象は現代の危機の象徴であり、其は同時に近代的合理精神は対する不信の表向である。事実我々は最早我々の生活形式を演繹し得る普遍的原理を失つたかの如くであり、苦悶する我々の周囲には大小様々の合理主義の怪物がひしめき合つて我々を圧殺するの勢いにある。或る人々は此をロマンティックの危機と称している。確かに近代合理主義の精神は、餘りにも多くの怪物を生み出した。上は政治経済の権力機構から下は雑多なイデオロギーに至る迄、この強力なメカニズムは、抽象とか理知の武器によつて人間からその具体性を抽出してしまつた様である。現実的な歴史的人間像は抹殺されてしまつたのであろうか、我々は今次の大戦に於て此の危険な運命を決定的に体験した、例えば、イデオロギーに或いは権力機構に、彼等は我々の意志を離れてひとりでに動き出す怪物ではないか。近代の救済、此の解決は至難である、それは最早、観念的な思惟の問題ではなくして限界に追いつめられた人間の生命をかけた実践によつて示されねばならぬ所である。

今ロマンティックの危機という問題を取り上げた私は此を通して一つの考察を展開してみたい、勿論、此の意味に於けるロマンティクは単なる文学流派のそれではなく、人間的存在の深奥にある生命の源泉ともいうべき力をいつている。

一般にロマンティクは青年と深く結びついている。「青年は力なり」とは青年の持つ本能的な奔放且、未完成の魅力に寄せられる讃辞であろう。歴史の原動力としての青年の力常は一種の危機を蔵し乍らも我々はその行動力に大きな期待を寄せざるを得ない。青年は可能性に満ちている、然しロマンティクが単に空想的な激情や悲愁を駆うものでない事を銘記すべきである。如何なるロマンティストも現実的行動に於ては現実的である、現実は空想的な存在を許さない。故に青年の魅力は現実的行動に対する可能性の中にある、それでは現実とは何であろう。我々は全く現実生活に安住し、その中に慰安や満足を見出している態度を積極的に現実的であるとは感じない、真のレアリズムは常識的な現実認識を超えてより真実な認識の上に成立する。其は徹底せる分析精神によつて更に一層現実的たらんとする意欲として始めて意義を持つのである。

「青年は力なり」此の言葉の意味を我々は精極的に肯定し、実践的に意欲しなければならない。此の自覚なき時、此の言葉はあらゆる形に於て悪用される危険性を持つ、少くとも近い過去に於ける日本の青年は悲惨であつた、間違つた野心や狡猾さを以て青年の力は誤つた方向は導し入れられた。きけわだつみの声を。今一度静かに耳を傾けよう。

近代精神の危機はより深くより身近く、青年の危機に結びついている様な気がする。

---

# 芦高校の制服あれこれ

## ―女子制服を見る―

「我が校には新しい制服がある、だからこれに反対するものは汽車に反対する大井川の雲助である」誰かが云うと「文化の目的は制服から脱出することである。制服主義は昔から専制的支配者の趣味であり、さもなければ戦争又は労働、或いは特権誇示のためにやむを得ず採用される簡単服に過ぎない。自由な国民は自由な日常服と美しいお祭の晴れ着文化を創造し楽しまなければならない」と云う声もするようだ。それは兎も角、終戦後満六年、六三制教育が新教育制度として採り上げげられ教育の機会均等がしきりに叫ばれるようになり、特に男女教育の均等として高校大学までもが共学実施と云うことになつた今日の状情が果してどんなものを新しく作り出させているのか今高校女子の制服のデザインに其様子を覗いてみよう

〃まじめな実用型〃

東京九段高男子の制服が背広であることは有名だがこの洒落た九段高ボーイに対して九段高ガールの冬の制服は紺サージ、シングルのスーツ（背広）ネクタイはえんじスカアトはタイトと女子生徒のデザインらしく一般的で一寸婦警の制服を思わせる。夏は未定とか。

〃男子とよいコントラスト〃

東京日比谷高ではまだ確定はしていないのだそうだが男子の学習院式背服に対してニユールツクで行こうという学校側のプランは（記者曰く、何と開けた先生達もあることか）まず実用的で経済的な無難な所からスーツかボックスコート（冬）あたりと云う。

〃ひだの数までお揃いに〃

熊本人吉高のは白ブラウスにジャンパースカアトでひだ二十八本、床から三十糎上りで一方のセーラー服のネクタイは紺色。

〃百貨店のデザイン〃

斬新も斬新、東京慶応女高では某百貨店にデザインを注文し、それだけに他よりぐつと目新しく、冬はグレイのダブルスーツとチヨッキ、スカアトと云う三つ揃いという。夏は未定だそうだけれど…。

〃純白の帽子〃

香川高松一高とは野球でおなじみだがここでは冬は紺又は黒のスーツ、スカアトも紺か黒。前に左右二つの箱ひだがある。夏上衣は大体白（又は水色）のブラウスで前合せネクタイは紺色のデシン。それに帽子が真白の六枚ハガキのスタイリスト型で帽章をつける。

〃経済的なデザイン〃

同じ東京は東京でもここ城南高では夏は白のブラウスにジャンパースカアト。冬は 夏衣の上にスーツ。と仲々経済な設計ではある。

〃年中白ズック〃

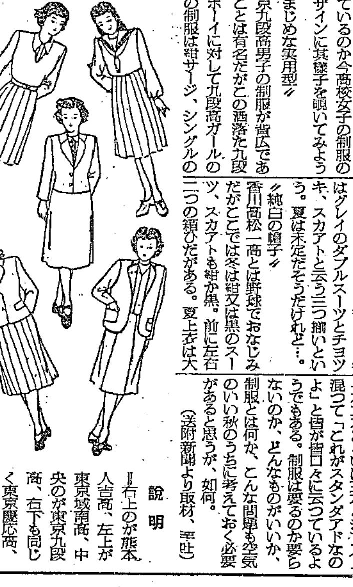
広島海田市高。冬は紺サージのセーラー服にプリーツのスカアト、夏も白ポプリンのセーラー服で衿だけ紺サージを用いコードを白二本とする。ネクタイは白絹のバイヤス。冬服の場合はスラックの着用はいいが履物が、男女共一年中白ズックと決めてある。

〃標準的簡単型〃

一方香川観音寺高ではピンタックのある白のブラウスに黒のボウ、前後に二本ずつの箱ひだのある紺のスカアトと云つた夏服だがどうも受けが悪いそうであるがまさか安上りを気にしてでのことではなさそうだ。

さて一通り見て廻つたわけだが本校の制服についてはどうだろう。一年生には正直な箱ひだ型のセーラー服遵奉者も見受けられるが二年三年となるにつれ白いコードが一本二本あるいは三本とまで入り混つて「これがスタンダアドなのよ」と皆が皆口々に云つているようでもある。制服は要るのか要らないのか、どんなものがいいか、制服とは何か、こんな問題も空気のいい秋のうちに考えておく必要があると思うが、如何。

（送附新聞より取材、幸吐）



説明

〃右上のが熊本人吉高、左上が東京城南高、中央のが東京九段高、右下も同じく東京慶応高、左下が東京日比谷高

---

# 校内英語辯論大會行わる

去る九月十五日本校初の試みとして校内英語辯論大会が本校講堂で行われた。出場辯士は約十名、審査は本校の英語科教官が総出でその労をとられたが主催側執行部では特に神戸二世人連盟委員の、ミセス・一の瀬を招いてジャッヂをお願いした。初めてではあつたが聴衆も案外多く盛況裡に会は進められた。井本文化部長の司会であつたが殊に三人の女性の出場が目をひいた。入賞者は次の通り

一位 The Diplomatic Sense　二年 小野原さん
二位 The Independence of Japan and Students.　三年 岡 君
三位 what is the true peace of the world?　三年 庄田久男君
四位　一年 貴志 君

三位の庄田君は主催者側からの出場であつたので結局四位の貴志君が三位となつた。主催者側の手落ちで順位をとり違えて発表したりしたが一位の小野原さんの「外交的感覚」など仲々うまみのある演説であつた最後にミセス・一の瀬の講評があつたがsとth、lとrの発音などまだまだ研究の餘地があるようである。これを機に日本語の弁論のみならず英語弁論の方面にも諸君の新しい努力を待ちたい。

學校新聞印刷
大阪北區老松町三ノ五七　昭榮堂

# 秋空に意氣高し

# 各運動部

## 續々國体出場なる

紺碧の空に乱れ飛ぶボール青空に響く快音その下には青春の血に燃ゆる若人がはちきれんばかりの意気でその情熱を発散させている。これこそわが芦高の躍動せる生命である。各運動部も秋のスポーツシーズンを迎えその活動に一層拍車がかけられて来た。夏休みを利用しての硬式野球部サッカー部ラグビー部バレー部陸上競技部の合宿練習やその他各夫々様の猛練習が早くも功を奏し特に硬式野球部の目ざましい活躍には天下に芦屋校ありの感を一層深めた。又山岳部が国体県予選で最高点を獲得、優勝の栄冠を勝ち得る等見るべき成果も少くない。

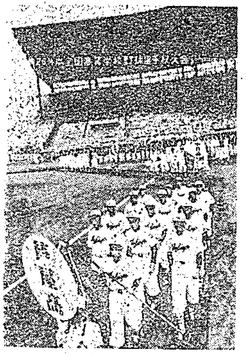
では最近の各部の戦績からその動きをたどつてみよう

（提出分のみ）

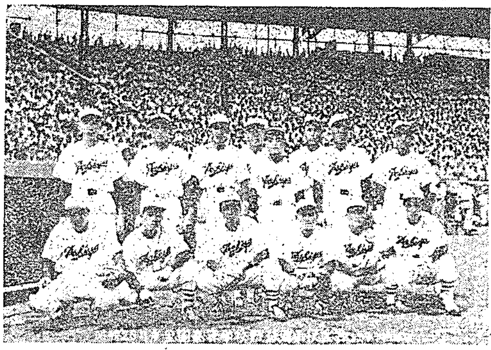
## 硬式野球部

全国高校野球兵庫予選（七月廿一日－卅一日）
第一回戦　対甲南高　1A－0　勝
第二回戦　対報徳高　8A－0　勝
第三回戦　対甲陽高　1－0　勝
準々決勝　対加古川東高5A－2勝
準決勝　対神戸高　6－1　勝
決勝戦　対育英高　2A－0　勝

全国高校野球選手権大会
第一回戦　八月十三日　対小倉高　7－1　勝
第二回戦　八月十六日　対長崎西高　5A－4　勝
第三回戦　対高松一高　6－2　負



入場式に於ける本校チーム



四度目の甲子園出場なつた硬式野球部）

故東口真平氏追悼
選抜高校野球大会（九月十六、十七日）
第一回戦　対済々黌高　2－0　勝
第二回戦　対平安高　9A－1　負

その他の戦績
（旧チーム）
九月七日　対山城高　8－3　勝
九月八日　対平安高　3－2　負
（新チーム）
八月廿九日　対兵庫高　3A－1　勝
九月廿三日　対[illegible]誠高　9A－2　勝
九月廿四日　対高松一高　2A－1　勝

## 軟式野球部

国体兵庫予選（8・10－20）
第一回戦　不戦勝
第二回戦　対私立神港高　7－0　勝
第三回戦　対[illegible]合高　3－0　勝
第四回戦　対市立神港高　8－4　勝
準決勝　対神戸高　4－2　負

阪神地区大会（9・8－22）
第一回戦　対住友工高　10－1　勝
第二回戦　対尼崎工高　4－1　勝
準決勝　対県西宮高　7－0　勝
決勝戦　対尼崎北高　3－1　負

## バレー部

【男子】
県総合優勝大会
第一回戦
芦高ク2（21 16 21／10 21 8）1三菱電気
第二回戦
神戸製鋼2（22 22 10／20 20 21）1芦高ク

【女子】
県総合優勝大会（八月五日明石コート）
第一回戦　芦屋2（21 21／10 10）0松蔭　勝
第二回戦　芦屋2（21 21／13 7）0西脇　勝
第三回戦　芦屋2（21 21／16 11）0篠山　勝
第四回戦　芦屋2（21 21／13 16）0県庁　勝
決勝戦　一見ク2（21 21／19 15）0芦屋　負

国体県予選
第一回戦　芦屋2（21 21／15 5）0豊岡　勝
第二回戦　兵庫2（21 21／16 13）0芦屋　負

## 硬式庭球部

全国高校選手権大会
シングルス川廷準決勝で慶応吉村に破れ第三位。ダブルス川廷和田組準々決勝で負ける

県高校選手権大会
川廷シングルスに優勝、ダブルス川廷和田組優勝、新人シングルス和田が優勝

マ元帥杯争奪大会
川廷出場法政大佐藤に敗る、本年度国体代表選手に推選される。

## 軟式庭球部

【男子】
県総合大会（七月廿四日尼崎）
決勝戦で齊多。室井が県伊丹に4－3で敗る

第二回白鶴杯争奪
県下高校軟式庭球大会（九月十六日）
一回戦　不戦勝
二回戦　齊多、室井4－2草水、加古
三回戦　齊多、室井4－1野尻、石田
四回戦　齊多、室井4－1田中、小林
準決勝　齊多、室井3－4山口、清水
齊多、室井組三位獲得

【女子】
西日本庭球選手権大会（参加二百チーム）
兵庫代表として服藤今永組出場四回戦迄残る

全日本軟式庭球選手権大会（参加四百廿チーム）
服藤金本組が参加第七回戦和歌山の杉本、津井田組に4－1で敗れ全日本第四位に入る。

第二回白鶴杯争奪
県下高校軟式庭球大会
一回戦　不戦勝
二回戦　服藤、今永4－0岡本、寺西
三回戦　服藤、今永4－0氏野、河知
四回戦　服藤、今永4－4小林、長谷川
決勝戦　服藤、今永4－2西尾、楠田
よつて女子は昨年にひき続き二年連続優勝した。

## 球心拝措

◎大腹ゆすぶつて大号一声〝芦高頑張れ〟の声援、扇の打ち振りよろしく、先ずは陣頭指揮の校長を炎天下のスタンドに、大会の幕は切つて落された予戦大会を通じての熱心さに一同啞然感心、自治会応援団も走る幌馬車を追つかける態であつた。

◎芦高名物数々あれど、名物中の名物は三々七拍子か知らねど、汗水たらした応援団諸士も、灘の生一本ならぬ並ん駄町の酒場応援の乱調子に、一寸目を見はり〝誰に見せる応援じや〟〝男女共学でさつぱり声が出ないぞ〟の芦高ファン狂のスタンドの鬨声如何にお聞きじや、尤も此等の種族には案外擬古趣味者が多いこと必定だが、

◎それでも小倉に勝つた時は気持が良かつた。全員安打、ホームランの快挙は、主力打者二名欠場の心配をふつ飛ばして、野球は九人でやるものじやない〟と言われた科学的野球を標榜しておられる監督さん以下所謂チームワークの勝利か。意気統合の賜か、とにかく一度に優勝候補にのし上げた。

◎対長崎西高戦の興業的価値満点あの打つちやりが所謂芦高精神か？

◎予戦通じて三振七十二個の高校ポツプフエラー剛球投手も連日の疲れか、この日は出来が悪かつた。予戦無事通過出来たのも、この君に負う所が大であつたのだから批難は当らぬが、人間とかくカタストロフに直面すると脆さを暴露するもの丁度古びた家の雨洩りを直す様なものだつたとは〝陰の声〟◎甲子園なる桧舞台で芦高という校名と共に奮戦比努めた野球部諸君に先ず讃辞を送らねばならぬ、経済的バツクを作つて下さつた後援会の人々に感謝せねばならぬ、連日諸君の一挙手一投足を見守つてくれた応援諸姉と共に戦つたことを多とせねばならぬ。野球部も、学校と共に大衆の中に生きていると言うこと。

◎盛者必衰の事戦いは常に心の中にあること。精神力の敗退は何物にも換え難きこと。それを養成すべき過程は、生活の中にあること。劃一的なもの、統一的なものへの完成には、悩みのあること、悩みを体験した悲壮からの出発でなければ、大成はせぬこと。等に、筆者は先輩Hと共に八月十七日の夜遅くまで語り合つたことだつた。単に野球部だけでなく……。（PO）

## バスケットボール部

【男子】
第六回綜合選手権大会（七月廿五日－廿九日）
第一回戦　対八鹿高校
芦屋34（11 23／10 4）14八鹿
第二回戦　対神港高校
芦屋15（7 8／4 0）13神港
第三回戦　対関西学院大学部（本大会優勝チーム）
関学大45（23 22／10 5）15芦屋

国体予選（九月十三・十四日）
第一回戦　対龍野実業高校
芦屋29（18 11／10 7）17龍野実
第二回戦　対加古川東高校
加古東26（15 11／14 10）24芦屋

【女子】
第六回綜合選手権大会
第一回戦　対県立尼崎高校
芦屋13（9 4／4 8）12県尼崎
第二回戦　対神戸クラブ（本大会優勝チーム）
神戸ク26（8 18／8 7）15芦屋

国体県予選
第一回戦　不戦勝
第二回戦　対兵庫高校
兵庫27（13 14／9 4）13芦屋

## 卓球部

【男子】
マ元帥杯阪神地区予選
笠松準決勝で敗る。第四位
阪神地区大会
国体第四位
個人小堀第四回戦で敗る
国体予選（阪神地区）
笹松、小堀第八位に入る
決勝で敗退

【女子】
阪神地区大会
個人戦中島第二位
国体予選（阪神地区）
中島ベスト8に入る

## 拳斗部

兵庫県選手権大会（七月廿六日－廿八日）
服部優勝
全日本高校選手権（秋田）
服部第二次予選で小原選手に敗る

## 送球部

八月廿五日
対甲南高校
芦屋5（4 1／1 3）4甲南

## 水泳部

阪神地区高校選手権
優勝　玉井公生（百米　自由型）
四位　本岡　章（百米　平泳）
四位　佐野良孝（五十米　背泳）
四位　木村　譲（八百米　自由型）
総得点に於て第四位

兵庫県市町村対抗
三位　玉井公生（百米　自由型）
四位　外海　達（二百米　平泳）
三位　リレー（二百米）
総得点に於て第三位

（堂々兵庫縣制覇のサツカー部）

## 山岳部

国民体育大会予選
（参加者）
津田先生、小森、松本、砂川、藤原、日比、河本、三宅
（場所）　道場　不動岩

九月廿三日
道場駅に精鋭二十数校参加し駅前より道場河原に行進、直ちに露営夜キャンプファイヤを囲み各校自校紹介に始り戦績計画等それぞれ発表明日への自信を一層深めた

九月廿四日
六時半より各校二パーティ出場の下に不動岩西稜を吾校先頭に登攀開始、平常の練磨と経験を十二分に発揮しこれを征服、あとはその結果を持つのみとなつた。再び全参加者集合のもとに結果発表があり露営法、行軍法、岩登り、服装、態度の各般にわたる精密な検査による採点の結果総合得点百廿五点を以つて見事県下第一位の成績を獲得した。芦高から小森主将が代表として国体出場の栄冠を得たといえ県代表として六名のうち一人しか選抜されないということはこの日の為吐血の思いで困難を克服して来た芦高山岳部にとつて生命を共にと誓いあつた参加者の間には残念中の残念である。

# 西日本豫選に入賞

## ―音楽部―

芦高文化部中最大の部員数を有する音楽部は昨年コンダクターに松中君を得て以来発展の一途を辿つて来たが秋を迎えていよいよ充実したメムバーはこゝに芦高文化部史上に銘記されるであろう一つの偉業をなしとげた、即ち去る九月十六日大阪毎日会館において開かれた第五回全日本学生音楽コンクール合唱科西日本予選に参加した芦高合唱団は、全関西から結集した精鋭40校に伍して日頃の練習に培つた実力を発揮し堂々入選の栄冠をかち得たのである。これまでも時々合唱祭等に参加したことはあつたがこのコンクールにおいてかくも見事に入選の栄冠をかち得たその蔭に払われた部員一同の熱と努力は賞讃されてよくこゝに芦高音楽部の存在は再認識せらるべきである。

## サッカー部

西日本高校選抜大会（七月廿五日－卅日）
長田高校と共に兵庫県代表として出場、参加校廿二校
第一回戦　対高松一高
芦屋2（1 1／0 0）0高松一
第二回戦　対高知農高
高知農1（0 1／0 0）0芦屋
我が芦高は二回戦で敗退したが同じく県代表として出場した長田高校が西日本の覇権を握つた。

国体県予選
（阪神地区大会）
第一回戦　対市立西宮高校
芦屋2（1 1／0 0）0市西宮
第二回戦　対関西学院高等部
芦屋2（1 1／1 0）1関学
第三回戦　対市立伊丹高校
芦屋5（3 2／0 0）0市伊丹
かくて阪神地区大会に優勝

（中央大会）
準々決勝　対兵庫高校
芦屋4（2 2／1 0）1兵庫
準決勝　対神戸高校
芦屋3（1 2／1 0）1神戸
決勝戦　対長田高校
芦屋2（1 1／0 0）0長田

遂にサッカー部は宿望を達して県下優勝のカップを芦高にもたらした。西日本選手権をもつ長田に勝ち堂々兵庫県代表として六日からの近畿大会（於西宮）に臨む。（山下記）

## 編集室

△いやしくも出版部員。満足なアーテイクルの一つぐらいは……新仮名遣い解説文章読本なんて云う贅物もある。云う方がいけないのか、云われる方がいけないのか、何にしても馴寒いペンの跡。もうこれ以上云うまい。云つても無駄だと知りながらなお口をもぐつかせる所に当面の悲劇があるのだろう。あゝいうこと（筆者曰く出版部所属問題を指す）になり乍らまた此処まで来た。一体此処とは何か。他でもない、もとのままの所である。云わんことではない、こう云うことは半分判つていた。永いブランクの原因がこれであるとしたら何と云うロスだつたろう。

△ただひたすらハイ・グレイドを目指したい、実質的にである。

△学期初め案外低調ではないかの下馬評だつた運動部がこれはまた意外な進出振りである、軟式庭球、軟式野球、山岳部と続いた所実に気持が好い。国体を目前に一層の精進を期待したい。（1）

# 〃ピカソを見て〃

山田幸平

ピカソを見て楽しかった。と言うのは多分私自身は考えさせて呉れたことだ。マチスの原画、メニューヒンの美しい音色を直接に見聞きして近頃芸術鑑賞上の革命的な気分を味わっているが、今又ピカソを見て以前から雑誌の評論などで造られていた先入的なピカソの概念はたちどころに崩されてしまった。ピカソは真に明るい。私は牧羊神を果物籠を三つの表情を持つ女の顔を順次に追い乍ら楽しい思考に耽っていた。

「ピカソは約束を守ってますね、誰よりも。」

側の友達の言葉にうなずき乍ら私は私でピカソの画の立体派たる所以をとくと合点した。画に深み、奥行があると言うことは、一流に達したものには必ずある。

マチスの画にもピカソの画にも必ずあるのだ。だが、一個の芸術作品には、必ず作者の姿勢が結晶されている。マチスの意図は空間をどの様に取扱うかにあり、彼の精力は空間を色彩に依って征服することに注がれている。しかしピカソは限られた一つの空間に時間を入れようとする。自然にしろ人間にしろ一つの対象を永く見続けた果てに来る一つのデフオルメ、そのあふれる交響詩がピカソの画には確在する。絵画が他の芸術と区別される理念、又は限界と言う通念をピカソは見事に破ってしまった。

自己とは何か、とひたすらに問い続け乍ら遂に自己を規定することの不可能を悟り、乃れの疑わしさから世界の疑わしさ迄、小説の場を拡大し深めたドストイエフスキー、更に失われた乃れの過去を確保するために意識の純粋持続と言う生命の主題者に賭ろうとしたプルーストと同じ努力を、画家が求めてはならぬ 根拠が 何処にあるか、ただ画家は絵筆でカンバスに立ち向わねばならぬ。色と形が画家に与える制約よりもはるかに手でたえがある。しかし、若しこの抵抗を制御したあかつきは、画家の魂ははるかに純粋に、画が人を打つ力は小説よりもはるかに力強くなる筈だ。ピカソは此の事を信じていた。そして努力した。彼の才能がものを言うのは此の時からだ。ピカソの表情が、ピカソの画が明るいのは、絵画自体の持つ運命に極度に随順した為だ。画の自我はなによりもアポロ的だ、なんと云う明るい苦しみだ。白い短形に見事に定着された二つの表情を持つ女の顔を凝視めながら、私はため息をついた。美術館を出て、階段を降りた。白い雲がすみ切った青空に浮かび、側の野球場に球の音、汚った人の歓声が聞えた。私は人込みに向って歩き出した。疲れ切った浮浪者が歩み寄ってくる。

# 校外短信

『井蛙の見』をはずるは文明人共通の観念である。でそれを多少なりとも満たすために北は北海道から南は九州に至る全国津々浦々の高校から続々わが出版部あて送られてくる新聞より耳よりな話を選び出して諸君にお知らせするのが本欄、加えて頭の記事ともなれば幸いである。

### ◆〃學〃園・樂〃園〃?

金沢の北陸女学園校舎復興とあって先般アチラの方の好意で総工費七千万円が送られ建坪二千坪地上三階地下一階その上昇降はエレベーターを使用映写室、社交室、食堂等を完備した豪華きわまる鉄筋コンクリートで新築の運びとある全く夢のような学園。

### ◆試験エレジー

山河越えたいずこでも変らぬものの一つに試験の悩みがある。特に病後の試験はやりきれない。之に直面した高山高校の某君白紙で出すのはちょっと惜しやとばかり書きつらねた即興の一首、

長く病み学ぶひまなく
今日出て
試験に臨む身にぞ悲しき

これを見た担任の先生が返歌をもたらしたのに曰く、

かくばかり若人の心
打ちくだく
試験は悲し師も悲し

### ◆真の美術の探究 では

堀川高校ではケンケンゴウゴウたる反対を押し切って毎週水曜日に裸体モデルに高価なデッサンを描いている、部―その名は言うまでもなく美術部だが始め三十名の小世帯が押すな押すなの盛況最初反対の教官やPTAも通いなれてくる内に「美術の探究はほんとうに裸体によってつかまれると言うのがどうして今までわからんやったろう」「我もし若かりせば」と老いらくを嘆いているそうな。

### ◆貴方は狙われている

校内盗難のヒンピンとおこるに忍ぶあたわずと遂に探偵部設置となった石巻高校。そのモットーは校内の民主化にありと甚だ聞えはよいが警察国家の再現の錯覚をおこしそう。一日も安閑としておられぬ今日此頃ですわい。

### ◆ノド自慢異色篇

生徒の不勉強作戦に頭を悩し授業時間の効果を上げようと仙台一高の某教官色々対策をねった末質問に答えられぬ生徒に歌を唱わせる迷案?を考え出した。生徒側は思わぬ新手に乗ぜられ原語の歌や童謡俗曲まで飛び出しての盛況、予想以上の効果に「こたえられん」(東北の方言) とほほえんだのも束の間或組ではその来謙を歓迎して黒板に曰く「さあ皆さんお歌の時間ですよ。」

### ◆ヨットの生産教育

県立といえ県費から出るのは校長以下教職員の人件費だけ諸施設費はみな市費でやっていくという特殊な条件におかれている県立相生工業高校では学校経営の活路として教育と実社会を直結するため「生産教育」に新しい道を求めることになった。即ち同校造船科の生徒は実習をかねて昨年からヨット二隻、ボート一隻伝馬船一隻を建造したが非常に好評を博したので目下一ンのモーターボート一隻、ヨット一隻を建造中とのことである。

### ◆授業料滞納者のない學校

授業料未納者の張り紙の絶えない学校は本校のみならず他にも多くあるがこれはまた滞納者のない学校がある。それは鳥取西高校、それもその筈一ケ月以上滞納すれば停学とこれはまたきつい公告を出したから。

### ◆二宮嗣三君

二宮尊徳は広く知られているが富士高校に五代目の子孫がいる。名を嗣三君といって翁におとらぬ勤勉家であるとのこと。

### ◆女學生の持つ悩みは?

大阪金蘭高校では世論調査によるとその悩みとして次の様な結果が出た。1戦争への問題。2学科の成績。3自己の容貌。4過去に於ける過失。5異性との問題ETC……。

### ◆美人の特權ここにあり

長崎高校をはじめ女子のパーマネントは御法度の学校は少くないが八都高校では風紀反省の項目中に頭髪問題が挙げられており「女子はパーマネントをかけぬこと」を明記されているにも拘らず依然としてパーマ頭が見受けられる状態。これに対して職員会議の結果「パーマネントは美人にのみ許可す」との宣告が厳達された。われと思わん者はかけるべしですネ。

### ◆断髪令施行

長髪をなびかせ青春を謳歌しているつもりでいた生徒にはこれ又きつい旋風―洲本実商では風紀粛正に対する第一歩として全校生徒に一斉断髪令が施行された。理由は若人の情熱を学問に傾倒するならば頭髪手入れの時がないはず、それに親の脛をかじる身でポマード代はぜいたくだというわけ。いやはやくちびる寒い秋です。

# 〃シラノ・ド・ベルジュラックと その偉大なる鼻への讃歌〃

中野順一

何かについて、ものを云おうとする場合にぼくらはすぐに批評癖から、なんのかのと云わずもがなのことを云ってしまいがちなものである。だからぼくはむしろ「シラノ」を観て批評めいたものを書こうと云う気持にはさらさらなれない。福田恒存がその大衆演劇論に於いて、その方法は対象にべた惚れに惚れぬくところから始める、と云った意味のことを云っていたが、ぼくの場合にもこの方法によって始めようと思うのである。即ち、シラノ・ド・ベルジュラックの偉大な鼻と心意気にべた惚れに惚れぬくことだ。―と、まずぼくは勿体ぶった姿勢をとってしまったが、じつのところ、ぼくはこの劇が好きで好きで、誰が何と云ったって好きだと云うことにすぎないのである。もちろん、この劇の甘いロマンチシズムとか、韻文劇と云うもののもつ運命的な近代性の稀薄さとかに論議の餘地は残されるであろう。しかしながら、芸術とは、演劇とは神聖犯すべからざるものであると云ったふうな深刻主義者の通俗説などは、シラノの前ではどうでもよいのである。シラノはあのでっかい鼻をぴくりとさせて、かの悲劇のふとっちょモンフルウリイに叩きつけたように、「その尻のような頬ぺたを張り飛ばし」したかもしれない。

エドモン・ロスタンは、ヴイクトルユーゴーの「エルナニ」によって狼火をあげたフランス・ロマン主義の最後の閃光であり、かつロオマン主義の諸作のうちの最高峰である。一体にロマン主義演劇は夢幻的ではあるが作劇法の上に於いて多くの破綻を示している。しかしロスタンのシラノではそのような破綻はなくみごとな造型をやってのけたのである。シラノ・ド・ベルジュラックが作者エドモン・ロスタンの稀にみる天才と洒落気によって颯爽とフランス劇壇にその勇姿を現わしたときのフランス演劇界の状態は、リアリズムや心理主義も さることながら、あまりにも猥雑なトリヴイアリズムに陥って停滞を極めていた折であったから、見物の喜びようは異常なもので、総立ちになって拍手喝采したそうである。シラノ劇の笑いと涙と憤怒と抒情と詩の氾濫が舞台を支配し、天馬空をゆくシラノの鼻とロクサアヌの美しさにエスプリの華が咲いたのである。

今文学座が多少のカットは止むをえなかったにしろ、五幕全部を演じ、大きな反響を捲き起し、以前どこの劇団だったか一寸度忘れしたが、ボオマルシエの「フイガロの結婚」をとりあげてやはり大当りをとったと云う事実は、ある意味で現在の日本劇壇に一八九七年シラノが初演されたときのフランスと一脈通じるものがあるのかもしれない。面白くもない赤リアリズムの多い中に、シラノとかフイガロとかがその素因らしいロマネスクの花火を打ちあげたことに、ぼくは快哉を叫ぶものである。

シラクは実在の人物で、十七世紀前半の宮廷生活の雅びな雰囲気の中に、奇才縦横の月世界旅行などと云う本を書いた詩人であり、剣客であり理学者であり、音楽家である。第三幕のロクサアヌ接吻の場に出てくる月世界旅行はロスタンがそれにもとずいて創作したものである。

胸の想いはいやつのるのに、己が途方もない御面相ゆえに才媛ロクサアヌへの恋を胸底深く秘めた彼シラノは、美貌の軍人クリスチヤンの影の男となって二人の恋をとりもつのである。この悲壮な自己犠牲と英雄主義とロマンチシズムは、文句なしにぼくらの胸に迫ってくる。五幕にも、シラノの作った狂言の一節をモリエールが盗んだと云って憤慨する元の菓子屋にして素人詩人なるラグノオに、「それで宜い、俺の生涯は人に糧を与えて―自らは忘れられる生涯なのだ―」と云い、モリエールは天才にしてクリスチヤンは美男なりき」と云うほどの、表面は傲慢にみえながら哀れなまでの謙虚な魂をもっていたのである。だが、シラノがその大きな醜い鼻を自嘲する一幕の 鼻ずくしを 単に饒舌な自惚とのみぼくはみたくないのである。シラノは運命論者ではなく、より大きな部分で唯物論者であり、自分の鼻を洒落のめす姿には一種の淋しさの中にも、どこかに快感が伴っている。

文学座では、シラノを三津田健、ロクサアヌを杉村春子が演ったのだが、ロクサアヌも単なる美人の貴婦人としてではなく、何となく(よい意味で)喰えない女として表現していたのにぼくは好感がもてた。恋愛劇のヒロインにありがちの、あの頭の悪さがロクサアヌにはなく、ある意味で近代的な思考をもつ女であるべきだからだ。

喜劇というものは、その主人公を作者は冷たく観察し、化の皮をひんむき、冷たく突放す。殆んどすべての喜劇にはだから結末がなく、観客は笑いの後にひやりとする一つの鋭利な 刃を感じるものだ。そこに喜劇と云うものの冷酷な風土が横たわっている。喜劇はだから苦しみにその情熱をかけるのである。悲劇では事情がこの逆になる。悲劇では、その結末の殆どが死であり、死でなくてもたしかに一つの世界の確定した終焉が示されるのであり、悲劇の終った先の方には、再び始まって続いて行く途がない。喜劇では終った先の方に再び複雑な途が予定されるのである。喜劇を裏がえせば悲劇になると云うのもこの辺のことなのだ、一体、喜劇と悲劇とを分離すると云う考え方がよくないのだが、ぼくは悲劇と云うものは救いをもつ形式であり、喜劇と云うのは救いをもたない形式ではないかと思えるのだ。が、しかしここまでくると、喜劇と悲劇とがでっちやになってしまうかもしれない。

そう云う意味で、ぼくはシラノの位置を悲劇として設定したいのである、もちろんロスタンの劇にはずい分笑いがあり、芝居があり、この上なく楽しい。しかし、その笑いの性質はどうだろうか。そこにはモリエール的な、骨にまで突き刺さるような辛辣な、鋭い笑いはない。シラノの笑いはその鼻をめぐる駄洒落と警句にあり、社会的な聯関に於いてとらえられる笑いではないのである。もちろん、社会的な聯関など、シラノに関するかぎりぼくの知った事じゃないが、だからシラノ劇で発散する笑いは、個人的な、シラノと云う己れを知り、意識するドン・キホーテの必死の姿からくる笑いなのだ。

詩人の死ぬやその言悲し、とかって詩人萩原朔太郎は云ったが、権威に屈従せず、浮薄を忌み、一人白木のように毅然とその自我を主張し虚偽と妥協、偏見、卑怯、猜忌の亡者どもと闘って傷つき倒れるシラノの姿は悲しい。しかしながらロスタンはシラノの魂に万斛の涙をそそぎ、その心いきを抱いて月世界へ旅立たせたのである。シラノの物語は終り、その悲劇は完結する。

ぼくはもう一度云おう。シラノ・ド・ベルジュラックは断然素晴らしいのである。奇妙奇天烈で愉快で奇想天外で、鬼面人を驚かすプレシユウで派手で、地口警句の名人で、そして淋しい孤独な魂なのである。

よく指摘されるように、この劇は歌舞伎とある近似性をもっている。日本では始め「白野弁十郎」として歌舞伎化されたが、容易に歌舞伎されうるほどに歌舞伎的である。ことにあのブルゴーニュ座芝居の場の華やかなチャンバラやら、いくらでもころがっている「みえ」やら大芝居やらがそうである。しかしそうすることによって各人物が固定化されず、また観念的にもならないので、みごとな定着をなしえたのは、「修辞学優等」を得たロスタンの資質にぴったりはまったからであろう。訳は辰野隆、鈴木信太郎御両人で歌舞伎調を巧みにとりいれた名訳であった。

ものごころついて、ぼくが最先に親しんだものは、このシラノで、それ以来シラノはぼくの心に灼きついて離れない薬のようなものになっている。じっさいぼくはシラノを何度読んだことだろう。読む度にぼくは欣喜雀躍し、ゲラゲラ笑いこけ、そして眼頭を熱くするのだ。(大きな声では云えないがぼくはシラノを見て泣いたのである) 甘ったるいセンチメンタリズムと云われるであろうか。だが、心理だの現実だのと云うこちたき類のものは、しんずしんずとかなぐり捨て、あのみごとなカタルシスに身を投じようと云うのである

―何だかぼくは一方的なのぼせ方をやってしまったようだが、最後に稀代の英傑

哲学者たり、理学者たり
詩人、剣客、音楽家、将た天界の旅行者たり打てば響く警舌の名人、さては又私の心なき―
恋愛の殉教者―
エルキユウル・サヴイニヤン・ド・シラノ・ド・ベルジユラックの偉大なる鼻に心からなる拍手喝采を送る。

# 傳統不要

弓月道則

生意気なことと思うかもしれない「止せ止せ理屈屋」と嘲笑する若者がいるかもしれない、事実そうした連中が男女を合せて多数いるのである、そしてこちらにすれば居てくれなくちゃ言い甲斐もないことである

学校創立十餘年の本校で伝統という概念はあまりピンと来ないこと思うが、この中の幾らかの人は学区制以前にそれ相当に伝統をもった学校から編入された方もあり、伝統の中で学ぶことがいかに変態的なものを生み出しているかという経験者も居ることと思う。

ここで私達は学校における伝統について二・三考慮をめぐらさねばならない。

学校とはその目的如何にかかわらずそれは単なる一手段としての一機関にしか過ぎない、もし学校という存在が一手段としてのみならず個人という人格的関係にまで絶対的な権威を示すことはあきらかに学校の優越であり、ひいては学生の悲劇である

だが残念なことにはすでにその悲劇は現代学生の身体を蝕いつくしている。

そして学生はその悲劇に満足することをもって優等生とされている、恐るべき錯誤である、それに対する反抗は学生の本道にはずれることがあるとして批難されるのが常である。

手近な例をあげよう、諸君は学生帽を見る「これが学生である」という盲目的服従から、そしてそこに燦と輝いている校章を見つける、その校章は何を意味するのか、それは、「私達は何々校の生徒である」という標識にしか過ぎないのである、私達は個別的に自分の学ぶ学校にプライドをもつことを示とされて来た。

これは明に、学校の権威が個人的人格にまで滲透して来た好例であろう、私達はここに、私は学生であるというべきプライドを、私は何々校の学生であるという狭範囲の個別的なプライドに擬客換ることが良しとされて来たのであると知覚される

これを伝統について考えて見よう。

私達は今まで伝統を喰って生きていたシミの如き人間であったことを知るべきである、次にこうしたことも知って見よう、私達が伝統によって生かされていたがため、伝統の前にあっさりと自分の人格を投げ出していたこと、即ち人格の束縛を伝統なるが故に許していた事伝統何十年と数える学校に入れば、まず私達はこうした言葉を聞かされる「古き伝統と…」

こうした言葉の中に、私達はほとんど無抵抗に等しく、その伝統の前に身を委せて来たのであった

その結果は何であったか、単にして機械のロボットを作るに過ぎなかった。

学校が「いろは……」を云えば学生をやはり「いろは……」といった、時たま「あいうえお…」とでも云おうものなら有るまじき事として即時馘にされた、しかし注意しなければならない、私達の歴史を動かしたのは前者の如き人間ではなくして、後者の如きつねに古き権威と闘うものがなしたことである

こうして伝統を味噌糞に云っていると、こういう者がいるかもしれない「じゃ、伝統を破ったお前の権威は何だ」これに対して、私はこう答えねばならない

私には頼るべき権威はない、そして、そうしたものは不要であると

「なんと、ひ弱い声だ」とばかり、嘲笑うかもしれない、私も又大声で笑いながら答えるだろう。

「そうだ、それが人間の本来の姿だ。君は権威に圧しつぶされている自分を見ることが出来ないのか」

私達は古き権威の破壊から駒を進めて行くべきだ、即ち、学校に於ける伝統、私達は伝統の分厚い殻を打ち壊すことによって束縛されない自己の本来の姿を見出すべきだ。

伝統は私達のロボット化を推進するのに役立ちこそはしたが、人類歴史進歩の何んらの役にもなっていない。

私達は、こうした伝統こそ、もう不要だと叫ばずには いられない。